

『あふれでたのはやさしさだった』

2019年09月26日

新聞やテレビは、連日のように起こっている犯罪事件を報道している。被害者になった人は気の毒で、死者には深い哀悼が寄せられ、被害から立ち直れるように支援する励ましの声があるのは当然である。反対に、加害者はいかにも極悪犯罪人扱いにされ、家族の者たちにも好奇のまなざしが向けられている。犯罪を起こしてはならないという正義感に基づく報道は理解できる。しかし、ワンパターンに既成化された報道に触れる度に、加害者が犯罪に走った背景を丁寧に読み解くことが大切ではないかと**思ってきた**。

童話作家の寮美千子氏は、奈良少年刑務所に通い、刑務所に収監された少年たちと、絵本と詩を介して、交流した素晴らしい体験を報告している。彼らと向き合って、心を開かせ、回復していく道程は感動的である。寮氏は、刑務所に入るような人は狂暴で、恐ろしい人に違いないと思っていた。ところが、実際の少年たちは極度の貧困の中で育ち、いじめられ、虐待を受け、福祉や支援からこぼれ落ち、加害者になる前に被害者である子どもたちであることを知ったと言う。彼らは自分を守ろうと鎧を身につけ、殻に閉じ籠ったり、わざと強がって見せたり、くだらない冗談を言い、無意味に笑い、必死で心の扉を閉ざしている。寮氏は、彼らに「詩」を書かせ、その詩を受け止めてくれる仲間の存在によって、愛されたい、愛したいという心の底で眠っていた思いを目覚めさせることに成功している。そこに、「あふれでたのはやさしさだった」と言う。感動した一つの例を紹介したい。

寮氏は詩を書くように求めると、皆「詩なんか、書けない」と拒絶する。しかし、上手に書く必要はない、何を書いてもよいと促し、「好きな色」について書いてくださいと求めた。D君は「くも」と題して、「空が青いから白をえらんだのです」と一行の詩を書いた。父親から金属バットで殴られた痛々しい傷跡を持つ彼に、声に出して読むように諭すと薬物中毒の後遺症があったが、ようやく聞き取れる言葉で読んだ。仲間たちは一斉に拍手を送った。すると、拍手に押し出されて「話してもいいですか」と、心の扉を開いた。今年母の七回忌である。母は体が弱かったが、父はいつも母を殴っていた。小さな自分は母を守ることができなかった。母がなくなる前、病院で自分に「つらくなったら、空を見てね。わたしはきっと、そこにいるから」と言われた。母のことを思って、「空が青いから白をえらんだのです」という詩を書いたと言う。一行の詩の向こうに、こんな物語があったのである。少年の一人が「Dくんは、この詩を書いただけで、親孝行やったと思います」と言った。別の子から「Dくんのおかあさんは、きっと雲みたいになっ白で清らかな人なんだろうと思いました」との発言があった。すると、背が高いのに、いつも背を丸めて、縮こまっていたE君が手を上げた。発言を促すが、なかなか声にならない。絞り出すように「ぼくは、おかあさんを知りません。でも、ぼくもこの詩を読んで、空を見上げたら、おかあさんに会えるような気がしてきましたっ」と言い、わっと泣き崩れた。仲間は彼を口々に慰めた。犯した罪の深さにおののき、生きる価値がないと自殺未遂を繰り返し、自傷行為が絶えなかったが、この日を境に、E君は劇的に変わった。母のいない淋しさを、皆の前で告白でき、それを仲間たちに受けとめてもらえた経験が、彼の心を癒したのである。E君は、実習場で、副班長になるほど成長した。

寮氏は、彼らが更生するためには、彼ら自身の更生への意欲と、もう一つは世間の理解であると言いき、犯罪に走った人は耐え難い孤独と苦悩を背負い込んでいる人で、優しい一言と仲間から受け入れられる喜びが彼らを立たせていくと訴えている。